

渡航型短期海外研修の教育的インパクト： 既製プログラムの効果検証

ハドリー 浩美

新潟大学教育基盤機構国際センター

要旨：本研究は、海外の大学が提供するテラーメイドではない既製の短期海外研修が、日本の大学生に与える教育的効果を明らかにすることを目的とした継続研究の一環である。ハドリー（2022, 2023a, 2023b）では、新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン形式に転換された研修を対象として、参加者の量的・質的データから既製のプログラムが言語運用能力やその他の側面に及ぼす教育的効果を分析した。本稿では、2023年夏に再開となった渡航型プログラムに参加した地方国立大学の学生からデータを収集し、既製プログラムの教育的効果を分析した。その結果、参加者の英語スピーキング能力、社会人基礎力とされる「実行力」、「課題発見力」、「発信力」、さらには「チャレンジ力」、「異文化コミュニケーション力」等に一定の向上が認められた。今後は、本プログラム参加者に対するインタビュー調査等を行い、経年データを蓄積して分析する予定である。その結果を踏まえてホームキャンパスでの事前・事後研修を改善することにより、学士課程カリキュラムの正課科目となっている短期海外研修の質保証に寄与することが期待される。

キーワード：渡航型短期海外研修、既成プログラム、英語運用能力、社会人基礎力、事前・事後研修

1. 背景と目的

日本の大学では、夏や春の長期休暇を利用した短期の海外研修が学生留学の主流となっていたが（文部科学省, 2023）、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、これらの研修プログラムは中止を余儀なくされた。感染症の収束とともに参加者が増加することが期待されていたものの、実際に派遣が再開されると、急激な円安や国内外でのインフレ、ウクライナ戦争による原油高などが影響し、航空運賃や参加費の高騰という問題に直面することになった。これに対処するため、関西学院大学では長期だけでなく短期のプログラム参加者に対しても、従来の奨学金に加えて支援金を提供しているという（関西学院大学, 2022a, 2022b）。しかしながら、多くの大学では、経済的な理由から参加を諦める学生が増加しているのが現状である。

このような状況下で学生を派遣するには、プログラムの教育的効果をこれまで以上に明確に示す必要がある。とりわけテラーメイドではない既製のプログラムにおいては、単なる「いい思い出」に終わらないよう、ホームキャンパスでの工夫が求められる。具体的には、期待される教育的効果を特定し、それに基づいた指導を研修前・

研修中・研修後にわたって行うことが重要である。本稿は、既製のプログラムでこれを達成するために必要な現状分析を目的とするものであり、2023年8月から9月にかけてニュージーランドの大学が現地で提供した約5週間の既製の英語研修が、新潟大学からの参加者にもたらした教育的効果について、学生の英語運用能力テストや自己評価アンケート調査の結果とリフレクション・ペーパーをもとに量的・質的に分析する。

なお、コロナ禍前の渡航型短期海外研修およびコロナ禍中のオンライン型短期海外研修の教育的効果に関する先行研究については、ハドリー（2022, 2023a, 2023b）を参照されたい。

2. 調査方法

2. 1. 調査対象者

調査の対象としたのは、上述の英語研修プログラムへの参加者15名であった。新潟大学からの派遣は実に4年ぶりであった。8月17日、18日の現地オリエンテーションに続き、8月21日から9月22日の平日に合計115時間の英語研修が実施された。参加者はプレースメント・テストの成績に基づいて5段階のレベル別クラスに配属され、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング、語彙・文法の総合的な学習が行われた。中級レベル以上の英語力を有する参加者には、IELTS受験対策科目や英語学習者向けのNew Zealand Studies科目が選択科目として提供された。参加者は現地の一般家庭に滞在し、週末などにはホストファミリーと共に過ごしたり、派遣先の大学が提供するアクティビティーに参加することができた。

さらに、現地での学びを促進するために、研修前にはホームキャンパスでの事前研修（異文化コミュニケーション）、研修後には事後研修（リフレクション）が行われ、研修前後に英語スピーキング・テストの受験と課題レポート（異文化コミュニケーション、リフレクション・ペーパー）の提出が課された。これらの取り組みにより所定の成績を収めた参加者には、正課科目として4単位が付与された。

本調査の対象者は参加者全員で、内訳は表1のとおりである。派遣再開直後であったことから、コロナ禍で渡航できないでいた2年生以上の学部生が、応募者の中から優先的に選抜された。

表1 調査対象者の構成（15名）

属性	学 部									
	人文	教育	法	経済	医	歯	理	工	農	創生
人数	4	—	—	3	1	—	—	3	4	—
属性	学 年				性 別		海外渡航歴			
	1	2	3	4	女	男	有	無		
人数	—	9	4	2	8	7	2	13		

2. 2. データ収集・分析方法

2. 2. 1 英語スピーキング能力

2022年度に英語の4技能を測定するテストを同研修のオンライン版参加者に対して実施したところ、研修後に伸長が確認されたのはスピーキング能力のみであった（ハドリー, 2023a）。このため、本調査ではスピーキング能力に的を絞ることにし、研修前後にVersant Speaking Testを実施した。これは、受験時間約20分のオンライン・テストで、流暢さ（Fluency）、発音（Pronunciation）、文章構文（Sentence Mastery）、語彙（Vocabulary）の4つの観点別スコアと総合スコア（Overall）がそれぞれ80点満点で受験直後に表示される。本テストの信頼性・妥当性についてはハドリー（2023b）を参照されたい。

参加者には受験に先立ちサンプルテストを受験させ、研修前後1週間で各自の都合の良い時間に本試験を受験させた。

2. 2. 2 言語面以外における教育的効果

研修前後の自己評価アンケートの結果および参加後の課題レポート（リフレクション・ペーパー）を分析の対象とした。自己評価アンケートは、独立行政法人日本学生支援機構の「留学前・留学後報告書（派遣学生用）」にある23の質問項目を踏襲したものである（独立行政法人日本学生支援機構, n.d.）。リフレクション・ペーパーには、研修やホームステイ等を通じて得た学びと気づきについての考察を日本語で記述させた。

分析の枠組みとしては、混合研究法の収斂デザイン（Creswell and Clark, 2017）を用いた。まず、自己評価アンケートの各項目における研修前と研修後のスコアの差と効果量を求め、つづいて、その中から有意差があり効果量が大であった項目をコードとして取り出し、それをリフレクション・ペーパーの質的データと照らし合わせた。

なお、研究・調査における個人が識別されない範囲でのデータの利用については、参加者に説明し承諾を得た。

3. 分析結果と考察

3. 1. 英語スピーキング能力

本調査ではサンプル数が少なく正規性が仮定できないため、分析には Wilcoxon の符号付順位検定を使用した。参加者の総合スコアに関しては、表2のとおり、研修前後で有意な差が認められ、効果量は中程度（ $r \geq .30$ ）であることが確認された。これにより、参加者のスピーキング能力に一定の向上があったことが示唆された。

表2 研修前・研修後のVersant Speaking Test結果（総合）

評価観点	N	研修前	研修後	Z値	r値
Overall	15	38.00 (36.00 - 41.00)	40.00 (38.00 - 45.00)	-2.17 *	.40

注) 中央値（四分位範囲）、Z値 * $p < .05$

つぎに、観点別のスコアを表3に示す。有意差が認められたのは語彙においてであり、効果量は中程度であった。帰国後のリフレクション・ペーパーにも、プログラム期間中に会話における語彙力の重要性に気づいたという記述が複数みられた。

表3 研修前・研修後のVersant Speaking Test結果（観点別）

評価観点	N	研修前	研修後	Z値	r値
1 Fluency	15	34.00 (29.00-37.00)	33.00 (29.00-42.00)	-1.94	.35
2 Pronunciation	15	34.00 (32.00-39.00)	38.00 (31.00-42.00)	-1.34	.25
3 Sentence Mastery	15	42.00 (40.00-45.00)	44.00 (40.00-48.00)	-1.10	.20
4 Vocabulary	15	41.00 (38.00-47.00)	47.00 (41.00-50.00)	-2.52 *	.46

注) 中央値（四分位範囲）、Z値 * $p < .05$

3. 2. 言語面以外における教育的効果

はじめに、自己評価アンケート調査の分析結果を表4に示す。「主体性」、「働きかけ方」、「実行力」、「課題発見力」、「計画力」、「想像力」、「発信力」、「柔軟性」、「ストレスコントロール力」、「外国人との協働力」、「チャレンジ力」、「異文化コミュニケーション力」、「外国人との交流」、「勉学意欲（語学）」、「留学先の知識」、「将来ビジョン」の16項目で有意差が認められ、その効果量は大 ($r \geq .50$) もしくは中 ($r \geq .30$) であった。

表4 研修前・研修後の自己評価アンケート調査結果

	評価観点	N	研修前	研修後	Z値	r値
1	主体性：自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる	15	3.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-2.12 *	.39
2	働きかけ方：仲間に働きかけ、問題点を一緒に改善するために行動することができる	15	3.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-1.98 *	.36
3	実行力：自ら目標を設定し、失敗を恐れず粘り強く行動することができる	15	2.00 (2.00-3.00)	4.00 (3.00-5.00)	-3.12 **	.57
4	課題発見力：自分なりに現状分析して課題点を具体的に提示することができる	15	3.00 (3.00-3.00)	4.00 (3.00-4.00)	-2.81 **	.51
5	計画力：課題に向けた解決プロセスを考え、計画的に実行することができる	15	3.00 (2.00-3.00)	3.00 (3.00-4.00)	-2.48 *	.45
6	創造力：既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい考えで、意見やアイデアを工夫して提案できる	15	2.00 (1.00-3.00)	3.00 (2.00-4.00)	-2.64 **	.48
7	発信力：自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるよう的確に伝えることができる	15	3.00 (2.00-3.00)	4.00 (3.00-5.00)	-2.81 **	.51
8	傾聴力：相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる	15	3.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-1.90	.35

9	柔軟性：	自分の意見ややり方に固執せず、相手の意見や立場を尊重して柔軟に対応できる	15	3.00 (3.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	-2.07 *	.38
10	状況把握力：	チームで仕事をするとき、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる	15	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	-1.15	.21
11	規律性：	その場のルールや手続きに従って、自ら行動や発言を適切にすることができる	15	4.00 (3.00-5.00)	5.00 (3.00-5.00)	-1.90	.35
12	ストレスコントロール力：	ストレス状況に置かれても、自分の成長機会だとポジティブに捉え、前向きに対処することができる	15	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-2.49 *	.45
13	外国人との協働力：	自分の文化背景の異なる場所また仲間とでも、リーダーシップを取ることができる	15	3.00 (1.00-3.00)	3.00 (3.00-4.00)	-2.54 *	.46
14	チャレンジ力：	リスクがあっても、挑戦してみることが大切だと考え、実行することができる	15	3.00 (3.00-3.00)	4.00 (4.00-5.00)	-2.85 **	.52
15	異文化コミュニケーション力：	不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる	15	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (4.00-5.00)	-3.09 **	.57
16	異文化理解力：	自分とは異なる信仰や文化的背景を持っている人を理解し、受入れることができる	15	4.00 (3.00-5.00)	5.00 (4.00-5.00)	-1.94	.35
17	外国人との交流：	国内・海外を含めて、外国人との交流がある	15	2.00 (1.00-4.00)	3.00 (3.00-4.00)	-2.34 *	.43
18	勉学意欲(専門)：	専門分野の勉強へのモチベーションがある	15	4.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-0.24	.24
19	勉学意欲(語学)：	語学の勉強へのモチベーションがある	15	4.00 (3.00-5.00)	5.00 (4.00-5.00)	-2.51 *	.46
20	留学先の知識：	交流先・留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある	15	3.00 (1.00-3.00)	4.00 (4.00-5.00)	-2.81 **	.51
21	政治・社会・国際関係の知識・関心：	政治・社会問題・国際関係について、知識・関心がある	15	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-1.57	.29
22	男女共同：	社会での男女共同参画(男女平等)の重要性を認識している	15	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	-0.28	.05
23	将来ビジョン：	将来の方向性・進路について、明確な考えを持っている	15	3.00 (2.00-3.00)	3.00 (3.00-4.00)	-2.52 *	.46

注) 中央値(四分位範囲)、Z値 * $p<.05$ 、** $p<.01$

つぎに、表4の中で有意差があり、かつ効果量が大であった項目について、研修終了後のリフレクション・ペーパーから関連する記述を2例ずつ抜粋した(表5)。表中にある括弧内の番号は、各参加者にランダムに割り振った番号である。

表5 有意差あり・効果量大の自己評価アンケート項目と質的データとの統合

実行力	海外の友人を作ることを目標にし、自分から授業初日に3人の学生に話しかけるのを目標にして、達成できた。台湾の学生とは日本語でも話しかけられることもあり、最後の課題と一緒にカフェに行くこともあった。(2)
-----	--

研修日2日目から授業中に自発的に発言をする [ことを目標に設定した]。授業が始まった日から発言を自発的にできたように感じる。日にちが経つごとに意見が出しやすくなり、5週目には多くのことを発することができるようになった。まだ少し間違いを恐れてしまうこともあるが研修前と比べると抵抗が減ったと感じる。(11)

課題発見力

仲良くしていたタイの留学生に、彼の関わる寺院へ連れて行ってもらった時のこと… (中略) タイでの主な仏教の流派は上座部仏教であり、それに関わる話と仏像の違いなどを見学させてもらった。その際に、日本でも仏教があると聞いたけれど何か違う部分はあるか、と質問された。そこで日本の仏教は基本的に大乘仏教であるが、日本古来の宗教と混ざり合うなどして既存の形とは変わっていることなどを伝えられたことがとても嬉しい体験の一つとなった。仏教という一つのテーマを通して互いの国を知り合うことができ、些細なことではあるが文化交流ができた故である。海外の人々と交流を深めていくためには、先だって自国の文化を学んでいくことが肝要であるとの考えに至った。(中略) 海外との比較文化的な視点を持ちながら日本について学んでいきたいと考えている。(6)

大学や街、家などダニーデンでの生活を通じて、人の優しさをとても感じた。最も感じたのはバスでの出来事である。日本とは異なりダニーデンのバスは停留所の案内がなく、自分で場所を把握して停車のボタンを押す必要がある。ある日、停車のボタンを押した人がいたが、運転手が気づかずに通り過ぎようとしたところ、降りる人以外の乗客の多くが運転手に呼び掛けて気づかせていた。他にも、バスの運転手の多くは乗車、降車の際に笑顔で挨拶を返してくれる。街中では、ふと目が合ったすれ違う歩行者が微笑みかけてくれた。ホストマザーからの優しさは言わずもがな多くの場面で感じた。渡航直後に3日ほど体調を崩した時には菓子のアドバイスや、レモンジュースなど栄養を補う食品をくれたりした。バスの本数が少なくなる休日は中心街まで車で送ってくれた。このような温かな優しさの根底にあるものは何かと考えたところ、人への興味関心ではないかと考えた。人に関心があるから、人の幸せを考え、挨拶や笑顔などをはじめとした人の心を多少でも豊かにできる行為をするのだと思う。実際に目が合った人に微笑みかけられて悪い気がする人はあまりいないだろう。人の幸せを自分の豊かさに結びつけることができる人が多いのではないかと考える。ニュージーランドの人との比較として日本人を挙げるが、日本人は冷たいと思われることが多い。それは不親切ではなく、他人に興味がない、極力干渉しないようにするということの表れだと考えている。道端で困っている人がいても助ける人はそう多くない。無干渉を好む人も一定数いるが、人との関わりが人生を豊かにしてくれると感じている。日本に帰ってからの行動目標として人との関わりを意識したい。具体的には、ニュージーランドと日本の差異を大きく感じた会計時の店員さんとの会話である。ニュージーランドでは“Hi, how are you?” といった一連の会話が最低でもあるが、日本では黙っていても会計を済ませることができる。日頃から、会計前のお願しますや会計後ありがとうございますとございました、飲食店であればご馳走様でしたを言うように心がけているが、上に挙げた会話や“Have a good day.” のような会話が日本にはない分、お礼を言う際の口調や表情を意識したい。(12)

発信力

ニュージーランドでは、聞き手の質問に対して、まずGeneral (概要) で大まかな要旨を述べ、次にDetails (詳細) やFeelings (感情) を述べることで一般論を補強したのち、最後にConclusion (結論) を述べるGDFCというスタンスであった。その後、質問者はわからなかった点や聞きたい点についてさらに質問していくという構図であった。授業では前者をa listener-responsible language、後者をa speaker-responsible language と定義しており、私はこのスタイルの違いを授業の冒頭で学び、非常に衝撃を受けた。最初は、語彙力や表現力の乏しさから論理的に描写することに苦勞し、まとまった文章を話すことがとても大変だった。ただ、クラスメートの描写の仕方や授業で描写に便利なフレーズを学び、徐々に説明の描写が充実したものになり、会話を楽しめる余裕が生まれるようになった。(7)

最初はなかなか自分の考えを英語で話すときに時間がかかってしまったり、言葉に詰まったりして上手く伝えられないと感じていましたが、徐々に自分の気持ちを的確な英語で伝えられるようになったと思います。(3)

チャレンジ力

二つ目は、とりあえずやってみることの大切さです。ホームステイの一日目、私はかなり緊張していました。そのため、自分の部屋に入ると、その後なかなか部屋から出られず、ドアの前でしばらく立ち止まっていました。しかし、部屋から出てホストマザーに話しかけたところ、とても明るく、親切に対応してくださいました。また、その日の夜に時間があれば一緒に話したいと伝えたところ、一日目から2時間ほどお茶を飲みながらゆっくり話をすることができました。その後もお茶を飲みながら話をするのが習慣となり、時間がなくても毎日1時間は会話をすることができました。(14)

私は高齢のホストマザーが一人暮らしをしている家庭にホームステイをしたが、研修期間の最終週にホストマザーがけがのため入院することになってしまった。(中略) つたない英語で自身の思っていることを伝えることには苦労した。しかし、職員の方は私のつたない英語に耳を傾け、最後まで話を聞いてくれた。また、何度も話し合いの場を設けて不安やさみしさを感じている私の精神面まで気を使ってくれた。その時、職員の方々の優しさを実感したとともに、自身の気持ちを言語化して伝える努力をすることの重要性を実感した。このように、伝える努力をした結果として残りの研修期間も有意義に過ごすことができた。また、ホストマザーのお見舞いに行き感謝の気持ちも伝えることができた。これは、現地でホームステイしたことを通して、海外には「察する」という文化がないという違いから自身の考えや気持ちを相手に伝える努力をすることの重要性に改めて気づくことができたと考えた。また、英語を話すという点においてはその能力を伸ばすのにも役立つ出来事であったのではないかと考える。さらに、どんなにつたない英語だったとしても伝える努力をすることで、伝わったときの喜びは大きなものとなる。そして、それは自信やその後の英語学習へのモチベーション向上にもつながるのではないかと考える。(4)

異文化コミュニケーション力

研修前や研修初めの頃は、授業中の英会話やホストファミリー、ランゲージセンターの先生と会話する際に、文法ミスや単語の言い間違いをしないことを意識しすぎてあまり話すことができず、ミスをするだけで話すのが嫌になり、英語あまり話したくないと感じることがあった。しかし、ランゲージセンターの先生に、ミスすることは悪いことではなくミスすることを恐れ何もしないほうがよくないといわれ、そこからたくさん会話をして自分のミスを振り返ることで、より語学力が向上できると考え、ミスを恐れずたくさん会話することを意識した。(5)

映画を見ていた時に主人公の性格が分からず、ホストマザーに質問したことがありました。私から見れば頑固そうに見えたためそれを聞いたかかったのですが、「stubborn」という頑固を表現する英単語が思い出せませんでした。そのため、「Doesn't he listen to them? I wanna know his personality.」と言ったところ、ホストマザーが「No, he is stubborn.」と教えてくださいました。正確に言い換えることは困難かもしれませんが、状況や何を知りたいのかといったことを合わせて表現すれば、大体は理解してくれることが多かったです。そのため、ただひたすらに英単語を暗記するのではなく、言い換え表現も合わせて覚え、連想できるようにすることが会話を続けるコツの一つなのだと学びました。(14)

留学先の知識

日本の家庭との違いについて論じていく。まず、料理をするのがホストファミリーなことに驚いた。滞在中、ホストマザーが料理をつくっている様子を一度も見なかった。料理自体も食材を切って炒めるなどの作業はせず、冷凍食品を解凍し、鶏肉や牛肉やジャガイモなどをオーブンで焼くだけなどのものが多かった。また、食洗機もあるため、家事に充てなければならない時間が日本に比べ、かなり短いだろうと感じた。これらの経験から伝えたいのは、食事に対する苦言では全くなく、日本の家庭の母親が日常的に充てなければならないとされる家事の時間が膨大であるということだ。母親が手暇暇をかけて料理を作るのが当たり前前の家庭で私は育ったので、この認識は改めていかなければならないものだ実感した。また、私が滞り込んだ家に限らず、多くの家庭で金曜日はビザなどを家に持ち帰り食べるのが習慣化されているようで、家庭の料理に対する考えが変わった。そして、ホストファミリーが食卓でふざける子どもたちに向かって、夕食は会話の時間だと言っているのも印象的だった。よく考えてみれば、同じ家に住んでいたとしても、意識的にしようとならなければ、会話をする機会があまりないことにもホームステイをして気づいた。日本でも家族との会話を大切にしたいと感じた。(2)

ダニーデンの市バスはどこでも学生料金は1ドルでフリーWiFiと充電スポットが完備されているバスが運行している。また、45分以内の乗り継ぎはタダという破格過ぎる交通機関である。これは人口が少なく鉄道での採算が難しいため、公共交通機関がバスの1つしかなく利用者の一極集中によって行えるサービスだと考える。ダニーデンの信号機には自転車用と歩行者用が別れていて道路もわかれている。これは自転車利用者に優しく事故が起きにくい工夫だと考える。ダニーデンは環状型交差点が多く存在し中心地や大通り以外は信号機があまり見かけなかった。日本には環状型交差点はほとんど存在しない。もっと日本に環状型交差点を設けることで渋滞の緩和などが進むと考える。ダニーデンの公道には大学校内の道路で見かける減速帯が数多く見掛けられた。これによって強制的に速度落とす為、事故防止に繋がる良い工夫だと思った。(10)

今回の研修では、クラスメートのほとんどが日本人学生であったため、現地のホストファミリーとのかかわりの中での気づきや学び、成功体験などについての記述が多

数を占めた。以上の結果から、本プログラムへの参加により、社会人基礎力（経済産業省、2006）とされる「実行力」、「課題発見力」、「発信力」のほか、「チャレンジ力」、「異文化コミュニケーション力」等が向上し、「留学先の知識」が増加したと、参加者自身が感じていることが明らかになった。「留学先の知識」に関する記述からは、知識の増加にとどまらず、実際の体験を通じて、それまで気づかなかった部分に意識を向け、問題解決につながるような批判的で省察的な思考が行われていることがうかがえる。

4. まとめと今後の展望

本稿では、海外の大学が提供するテラーメイドではない既製の渡航型短期海外研修が、日本の大学生に与えた教育的効果を明らかにした。現地ではクラスメートのほとんどが日本人学生という、まさに「日本人同士で固まって行動する短期研修」（芦沢, 2018, p.239）になってしまったが、そのような状況でも、約5週間の研修で英語運用能力および社会人基礎力をはじめとする行動特性に一定の教育的効果が認められた。

本調査はケーススタディであり一般化できるものではない。また、同じ大学がコロナ禍で提供したオンライン型研修の効果（ハドリー, 2022, 2023a, 2023b）との比較も、研修日数が大きく異なるなどの理由で容易ではない。しかしながら、本調査の結果を踏まえ、今後は参加者に対して経年的にインタビュー調査等を行うことにより、渡航型既製プログラムの教育的効果を高めるためにホームキャンパスで行うべき事前・事後研修、さらには研修中の指導に関する洞察を得ることが可能になると考える。中でも、研修後に英語スピーキング・テストや自己評価のスコアが低下した学生へのインタビューは参考になろう。このようなデータを蓄積・分析し、ホームキャンパスでの指導を絶えず改善することにより、学士課程カリキュラムの正課科目となっている短期海外研修の質保証に寄与することが期待される。

謝辞

本研究はJSPS科研費19K02882の助成を受けたものです。本稿で使用した自己評価データは、新潟大学留学交流推進課よりご提供いただきました。ここに記して感謝いたします。本稿に誤りがあれば責任は著者にあります。

参考文献

- 芦沢真五. (2018). 実践編 Eポートフォリオ学習成果分析と世代間交流～GJ5000プロジェクトと「留学のすすめ.jp」～. 横田雅弘, 太田浩, & 新見有紀子 (編). *海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定* (pp. 236-258). 学文社.
- Creswell, J. W. & Clark, V. L. P. (2017). *Designing and Conducting Mixed Methods Research* (3rd ed.). Sage Publications.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (n. d.). 【提出様式】「留学前・留学後報告書(派遣学生用)」(様式H-1). 2023年11月28日アクセス.

https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship_a/haken/2023.html

ハドリー浩美. (2022). オンライン短期海外研修の教育的効果：ケーススタディ. *新潟大学言語文化研究*, 24, 21-33.

ハドリー浩美. (2023a). オンライン短期海外研修の教育的効果 —英語運用能力に焦点をあてて—. *新潟大学言語文化研究*, 25, 21-27.

ハドリー浩美. (2023b). オンライン短期海外研修の教育的効果 —英語スピーキング能力に焦点をあてて—. *新潟大学高等教育研究*, 10, 22-26.

関西学院大学. (2022a). 11月2日：緊急の留学支援金に約9,000万円 急激な円安・インフレ等に対応. 2023年11月26日アクセス. <https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4747>

関西学院大学. (2022b). 12月7日：【続報】緊急の留学支援 2023年度に総額約1.7億円の支援金を予算計上. 2023年11月26日アクセス.

<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4784>

経済産業省. (2006). 社会人基礎力. 2023年11月28日アクセス.

<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

文部科学省. (2023). 3月7日報道発表：「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について. 2023年11月26日アクセス.

https://www.mext.go.jp/content/20230201-mext_kotokoku01-1412692_00003.pdf